実践報告

新カリキュラム　生活行動２「食べることと飲むこと」の授業展開と今後の課題

鰺坂　由紀*

Key words：新カリキュラム、生活行動、１年次学生

Ⅰ．はじめに

指定規則の改正を受け、カリキュラムの点検・評価をもとに見直した新カリキュラム（井上, 2023）を2022年度よりスタートした。カリキュラムの概念図は図１の通りである。本稿では、12の生活行動のうち、「食べることと飲むこと・排泄すること」にかかわる科目「人間と生活行動２」「生活行動逸脱看護２」「生活行動看護演習２」（全て１年次後期第３ターム）の授業の実際と今後の課題について報告する。

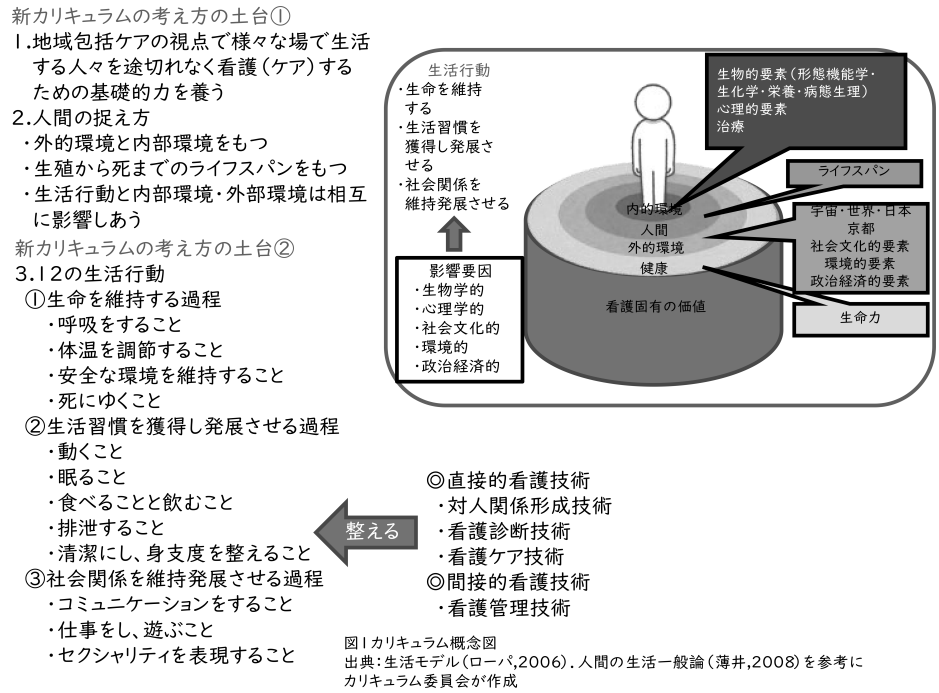

図１カリキュラム概念図
出典：生活モデル（ローパ,2006）．人間の生活一般論（薄井,2008）を参考に
カリキュラム委員会が作成

図１

* 京都看護大学

Ⅱ．授業の概要

「食べることと飲むこと・排泄すること」にかかわる科目の授業概要は表１、学修内容の一部は表２の通りである。

Ⅲ．授業の実際

1. 人間と生活行動２

学生が、自身の生活行動を具体的に想起しながら生物学的要因（人体の構造・機能）を学修できるように、例えば「食べることと飲むこと」においては、自分自身の「食べる」行動を具体的に想起しながら、認知し咀嚼し味わうこと、嚥下すること、消化することなどにかかわる人体の構造・機能の学修を進めた。教授学修方法は反転授業（小林, 2018）とし、最低限学修が必要と考えた内容を抽出した講義ノートを事前に提示しておき、授業では教員が全てを説明するのではなく学生の予習内容を引き出しながら、それを補うように展開した。また、学修内容をグループでディスカッションし、その内容についてロイロノートを用いてクラス全体で共有、ディスカッションするようにして、これらを通して学生がインプットしてきた知識をアウトプットする機会を増やすように展開した。

2. 生活行動逸脱看護２

基本的な学修方法は「人間と生活行動２」と同じであるが、本科目においては、事前に事例を提示し、調べたことを看護師として相手に説明できるように学修するという課題を加えた。例えば、糖尿病の学修では２型糖尿病と診断されたAさんの事例を挙げ、単に糖尿病の特徴的な症状を調べるという課題を提示するのではなく、「看護師さん、私はとても喉が渇きます。水分もたくさん摂るようになりました。尿量も増えているし体重も減ったかな…。最近、身体もだるいです。どのようなメカニズムで、なぜこれらのことが起こるのですか」「食事や生活習慣に気を付けてと言われても…。看護師さん、気を付けたことがいいことは具体的にどのようなことですか」というようなAさんの訴えを複数提示し、学生は調べたうえで、それをAさんがわかるように説明するというものである。このようにして、疾患の理解のみに留まることを避け、疾患がもたらす生活への影響と看護について相手の視点で考えるという本科目の目標に到達できるように展開した。

3. 生活行動看護演習２

事前に動画を視聴し、主に根拠を考えるワークシートに取り組んでいることを前提として、学生がグループでディスカッションしながら事例に対する援助を創出し、実践、改善していくように展開した。このプロセスにおいては、iPadで撮影した個人およびグループの援助動画をクラス全体で共有し、看護師と患者双方の視点からディスカッションを取り入れた。そして事後においては、ディスカッション内容を踏まえて撮影した動画を見直し、安全性・安楽性・自立性・自律性を踏まえた援助であったかについてワークシートを用いて振り返り、到達度を評価するように展開した。提示する事例については、一部ではあるが、連続して学修している「生活行動逸脱看護２」と同じものとし、例えば「生活行動逸脱看護２」で提示した２型糖尿病と診断されたAさんが自己血糖測定をできるように援助するというように繋がりを持たせていくようにした。

表１.「食べることと飲むこと・排泄すること」にかかわる科目の概要

科目区分		授業科目の名称	授業概要
人間	生活行動	人間と生活行動２	看護実践の目的は、人間ひとりひとりが自己の健康を保持、増進、回復することによって「よく生きること」を可能にすることである。その目的達成のために看護職者は生活行動を支援するという視点から、人間の生活行動の「食べることと飲むこと・排泄すること」を取り挙げ、ライフスパン別に、生活行動への影響要因である生物学的要因（人体の構造・機能）、心理的要因、社会文化的要因、環境要因、政治経済的要因について学修する。
健康・看護	生活行動	生活行動逸脱看護２	人間と生活行動２の学修を基盤に、「食べることと飲むこと・排泄すること」という生活行動の依存状態について学修する。ライフスパンおよび生物学的、心理的、社会文化的、環境的要因から理解を深め、個々の人間が生命体として持てる力を最大限に発揮してこれらの生活行動を営めるようになるための看護について学ぶ。
		生活行動看護演習２	人間と生活行動２、生活行動逸脱看護２の学修を基盤に、「食べることと飲むこと・排泄すること」という生活行動について、ライフスパン、対象者が生活するあらゆる場、あらゆる健康状態を踏まえ、安全、安楽、自立、自律を基盤に、対象者を尊重して科学的根拠に基づいた看護の方法を創出し、実施、評価、改善する思考と実践を学ぶ。グループワークを中心に必要な援助方法を創出し、学生同士で体験し、対象者の立場での評価を行う。

Ⅳ．３つの科目を終えた学生の感想

表３は、３つの科目を終えたあとの学生の感想の一部である。「人間・健康・環境・看護の理解」「学修の視点の獲得」「学修方法（アクティブラーニング・反転授業）に伴う実感」「学ぶことに対する面白さの実感」「看護師になることへの意欲・心がまえの形成」の内容が抽出できた。

新カリキュラムになり７か月が経過した段階ではあるが、学生の感想から、普段、特に意識することなく当たり前のように行っている生活行動は身体の働きによってなされていること、その身体の働きが逸脱した状態（疾患）になった場合、生活行動にどのような影響が生じるのかを理解すること、そして、あらゆるライフスパン、あらゆる健康状態にあるひとの生活行動を整えるケアを行うことが看護であることを修得しつつあることが推察される。生命と生活をつなぐ看護を連動して学修するために、３つの科目を週に３日間連続して展開する時間割構成も効果はあると考える。

また、学生は看護学を学ぶことに対する面白さを感じ、興味・関心を高め、看護師になることへの意欲・心がまえを形成している過程にあることが伺いしれる。個々の事前学習内容や感じ考えたことについて仲間とディスカッションし、共に調べ合ったり教え合ったりするアクティブラーニング（小林，2018）、予習していることを前提として授業に参加し知識の定着を促す反転授業（小林，2018）を通して、新たな視点を獲得し、一つ一つの知識を結びつけ、これらが学生の知的好奇心を揺さぶり、面白さや難しさから看護師になることへの意欲に繋がっているものと考える。

表２.「食べることと飲むこと」にかかわる学修内容（一部）

回	日程	学修内容
5	10月4日	Ⅰ.「食べることと飲むこと」 2. 幼児期・学童期: 1) 生物学的要因:認知・咀嚼・嚥下・消化・消化と吸収・栄養状態 2) 心理的・社会文化的要因、環境的・政治経済的要因
6	10月4日	
7	10月5日	
8	10月5日	3. 思春期・青年期・成人期・老年期: 1) 生物学的要因:認知・咀嚼・嚥下・消化・消化と吸収・栄養状態 2) 心理的・社会文化的要因、環境的・政治経済的要因
9	10月5日	
10	10月10日	
11	[illegible]	

回	日程	学修内容
4	10月19日	Ⅰ.「食べることと飲むこと」が逸脱した状況にある人の看護 2. 幼児期・学童期: 1) 生物学的要因 ・病例 ・各疾患がもたらす生命、生活への影響 ・各検査、治療と看護 2) 心理的・社会文化的要因、環境的・政治経済的要因
5	10月19日	
6	10月25日	3. 思春期・青年期・成人期・老年期: 1) 生物学的要因 ・病例 ・各疾患がもたらす生命、生活への影響 ・各検査、治療と看護 2) 心理的・社会文化的要因・環境的・政治経済的要因
7	10月25日	
8	11月1日	

回	日程	学修内容
4	11月2日	■症状・生体機能管理技術 1. 血液検査:静脈血採血 ・グループで援助を実施し、評価、改善する
5	11月2日	
6	11月7日	
7	11月7日	
8	11月7日	
9	11月8日	■検体検査 1. 血糖測定 ・グループで援助を実施し、評価、改善する
10	11月8日	
11	11月8日	

回	日程	学修内容
20	11月15日	■食事援助技術 1. 経鼻経管栄養法 ・グループで援助を実施し、評価、改善する
21	11月15日	
22	11月15日	

表３．３科目を終えた学生の感想

内容	学生の記述
人間・健康・環境・看護の理解	・今まで普通に行っていた食べることや排泄することが、どのようなメカニズムで消化されたり吸収されたりするかなどを学び、今後の看護師になるための基礎になっているなとすごく感じた。
	・普段何気なく習慣として行っている食事や排泄について解剖学とともに詳しく学ぶことができた。
	・生活行動逸脱看護2は人間と生活行動2の内容がどれだけ頭に入れておくべきだったかを痛感した。構造を踏まえたうえだと逸脱の内容が想像しやすく理解しやすい。
	・食事や排泄は生命が誕生してから死ぬまで当たり前に行う必要不可欠な生命を支える行為である。食べたいと思えば箸やコップを持って食べ、トイレに行きたいと思えば健康な人には意識することもない生活の一部である。しかし、逸脱した状況になればこれらの行動は難しくなり生活が一変する。何気なく送っている日常がいかに幸せか有難さを感じた。知識と感じたことを大切に実習、その後も活かしていきたい。
	・私たちが何気なく行っている排泄や食事などの流れは実は多くの器官に関わっていることがわかり面白さに気付くことができた。そして、健康が障害されたとき、様々なライフスパン、健康状態にある人それぞれの看護を考えていくことがわかった。
	・「生活行動」「逸脱」での学びを「演習」で関連付けて行うことができ理解が深まった。
	・解剖生理学を単体の講義で受けるよりも、逸脱や演習をつなげて学べたことでイメージしやすかった。
学修の視点の獲得	・演習は自分が行うと予想以上に難しいことやわからないことがあり苦戦した。一つ一つ根拠を持って行うことが大切だと学べた。
	・演習ではなぜ危険につながるのか、留意しなければならないことは何かの根拠を考えて行動する必要があると思った。
学修方法（アクティブラーニング・反転授業）に伴う実感	・事前課題をすることで授業でも理解しやすいし、内容の繋がりがわかったときにおもしろかったので、これからも事前学習を継続していきたい。
	・事前、事後課題をしっかりとすることで理解が速くなり授業を聞いて自分の事前課題と照らし合わせることで覚えるスピードも速くなった。
	・事前学習をしてきたことと照らし合わせて、更に知識を追加して学習を深めることができた
	・毎回の課題の量が多くて大変だったけど、わからないことを理解し、講義でもう一度確認する流れがあることで、わからないままでなくなく内容を理解しやすかった。
	・毎回の事前課題は大変だったが、あらかじめ内容を学習して講義に臨むことでより理解を深めることができた。確認テストでは自分の実力がわかり勉強への糧となった。演習では他者の実践を見たり自分の動画を確認することによって安全・安楽・確実性を踏まえた実施の達成に近づけた。これらの学びを活かして学習に励みます。
	・発表したりグループワークをしたりしたことによって、より積極的に授業に参加できた。講義ノートを通じてノートのまとめ方やメモの取り方などがわかり、自分なりにまとめる力が身についたと考える。
	・覚えなければならないことがたくさんあったり、演習では常になぜこうなるのか、なぜこうするのかを考えて行動しなければならなかったため、とても疲れたし、進むスピードも速かったため課題をこなすのも大変だったけど、グループメンバーで協力していろいろな視点から物事を考えることができてとても充実していた。自分では気づかなかったことをグループで発見できて改めて学ぶことが楽しいなと思えた。
学ぶことに対する面白さの実感	・形態機能学は難しかったが細かいところまで復習すると体の機能がおもしろいくらいに繋がってきて理解できると嬉しいし、国試問題が解けると学習が楽しくなってきた。
	・一つの臓器の機能を知っているだけで、そこに関連する疾患がなぜ起こるのかがわかってくることに面白さを感じた。
看護師になることへの意欲・心がまえの形成	・3つの授業が新鮮で看護師になりたいという気持ちが高まった。
	・滅菌物の取り扱いや採血の授業を通して、今まで以上に患者の命を預かる仕事をするという責任感を感じ日々の授業や演習、実習でしっかり学び行動していきたい。
	・どの科目も難しいが新鮮でだからこそ自分のなりたい看護師像がこれまでよりも明確になったことがとても嬉しかった。これからも妥協することなく頑張りたい。
	・看護学生であるという自覚をより強く感じることができた。今は、まだ看護の第一段階であると思うけど、この第一段階での基礎をどれだけ自分の力に変えられるかがこれらの勉強や実践に繋がると思うため疑問や学びを深めていきたい。
	・初めて看護師らしい仕事ができて難しいことも多かったが未来の想像ができた。
	・患者一人一人に対する看護について考え実践していくことは簡単なことではないけど看護師としてのやりがいがあると理解できた。

Ⅴ．今後に向けて

生活行動２「食べることと飲むこと・排泄すること」は、１年次第３ターム（10月）であり、看護学を学ぶことを目指して入学後まだ間もない１年次学生が対象である。だからこそ、特に、学生自らが疑問を感じ、学生同士で疑問を解決し、学生の興味・関心をさらに喚起できる躍動的な教育方法を工夫したいと考える。そして、探求力が身につき、難しさや苦しさのなかにも探求していくことの楽しさを感じられるような事前・事後課題および事例内容の洗練、提示の仕方、授業の組み立てを工夫していきたいと考える。本稿では学生の主観的な評価にとどまっているが、学生の学びから教授学習方法を評価して、最低限修得しなければならない知識や技術であるミニマムエッセンシャルズは何か、どのように課題・授業に組み込むのかの教材研究を継続することが課題である。

利益相反

本研究に関する利益相反なない。

文献

井上深幸，田口豊江，中島優子他.(2023)．生命と生活をつなぐ看護モデルへの転換，看護展望，48(3)，メヂカルフレンド社.

小林忠資,鈴木玲子.(2018)．看護教育実践シリーズ４アクティブラーニングの活用,医学書院.